

河崎 靖・坂口 友弥・熊坂 亮・Jonas Rüegg 共著

『スイス「ロマンシュ語」入門』

下 宮 忠 雄

スイスはドイツ語(言語人口490万)、フランス語(150万)、イタリア語(50万)と並んで第4の言語ロマンシュ語(engl. Rhaeto-Romance, dt. Rätoromanisch, fr. romanche, 3万8千)の存在で言語学者の関心と呼んできた。交通と近代文明の発達にもかかわらず、このような少数言語が元気に存在していることは、注目すべきことである。romanche「ロマンシュ」はラテン語 *lingua romanica*「ローマの言語」のフランス語の形である。本書においてはロマンシュ語の中で話者数が最も多いスルシルヴァ(Sursilvia, Obwalden)方言が中心に扱われ、地誌、文法記述とテキスト、語彙集が与えられている。全体のコンセプトは河崎氏が構成し、重要部分を執筆、他の三人が分担執筆した。本書のフォーマットは田中泰三『スイスのドイツ語』(クロノス, 1985)を思い出させる。

序「ロマンシュ語の現況」(河崎, S. 1-8)はスイスの言語人口、グラウビュンデン州の公用語とされるロマンチュ・グリシュン(Rumantsch Grischun)、方言地図、諸方言の用例、ミニ文法が紹介される。指示代名詞 *quest/quels/questa/questas*「この」、形容詞 *grond*「大きい」/*pli grond*「より大きい」/*il pli grond*「最も大きい」などを見ると、イタリア語に近いことが分かる。

第1章第1節「ロマンシュ語の言語文化誌」(Rüegg, S. 9-29)においてロマンシュ語(=レト・ロマンス語)のレト(Rhaetia)とは何かが語られる(Cherpillod (1991: 388)によるとエトルリアの王で、ガリア人により北イタリアに追放された)。北イタリアのフリウリ語(*friulano*)もロマンシュ系統だが、言語人口60万で、スイスのロマンシュ語よりもずっと多いという。S. 11の「プリーニウス・セクンドゥス(Plinius Secundus)」は「プリーニウス・セクンドゥス」の表記がよい。カール大帝の治世下(9世紀)にドイツ語の役人が浸透し始めて、ドイツ語の影響が始まり、ロマンシュ語圏の縮小が1600年ごろまで続いたが、1900年ごろロマンシュ語のルネサンス(*Renaschientscha Retorumantscha*)が国民の間に起こり、今日に至っている。ロマンシュ語圏に属する116の自治体のうち78の小・中学校がロマンシュ語で授業を行い、新聞2紙と民間ラジオ1局がロマンシュ語を採用しているという。

第1章第2節「ドイツ語との言語接触」(河崎, S. 30-43)。借用語の例として *silva*「森」の代わりに *Wald* が用いられるようになり、*silva* は *Sursilvan* (Obwalden), *Sutsilvan* (Unterwalden) のように地名に残る。*vorkommen*「現われる」の表現は翻訳借用されて *vegnir avon*, *gnir avant* などとなる。この問題は、かつて、Rohlf (1983) も扱った。

類例 *dt. weggehen = it. andare via (= andarsene)*。

第1章第3節「スイスのドイツ語」(熊坂, S. 44-50)。書き言葉としては標準ドイツ語を使用するが、2人称単数親称の代名詞(*du/弱形 t*)が接語として定動詞の直後に位置するときには、たいてい省略されるなどの特徴がある。*Woane gaasch?*(きみはどこへ行くのか)。チューリヒ方言にはフランス語からの借用語が多い。*Billeet* (*dt. Fahrkarte*), *Gwaföör* (*dt. Friseur*), *Schüp* (*dt. Rock*), *Velo, Welo* (*dt. Fahrrad*), *retuur, rötuur* (*dt. zurück*), *mèrssi* (*dt. danke*) < *fr. billet, coiffeur, jupe, vélo* (*vélo*, S. 49 は誤植), *retour, merci* など。*Es chunt chaalt.* (*dt. Es wird kalt.*) < *Ei vegn freid.* では *kommt* がロマンシュ語の *vegnir*「来る」の影響を受けて *wird* の意味に用いられていることが分かる。ロマンシュ語の *freid* は *fr. froid, it. freddo* である。

第2章「スルシルヴァ文法」(河崎・坂口, S. 51-94)は本書の中核をなす重要部分である。文字と発音、名詞、代名詞(イタリア語にきわめて似ている)、形容詞、前置詞、接続詞、否定、数詞、動詞、助動詞、過去形、再帰用法、命令法などが扱われている。p. 66の *saun*(健康な)の反意語 *malsaun*(病気の)の接頭辞 *mal-* は 에스ペラント語 *bona*(よい), *malbona*(わるい)を思い出させるが、反意語 *mal-* は 에스ペラント語のように使用領域が広い。フランス語にも *malsain*(病気の)があるが、普通は *malade* を用いる。

第3章「スルシルヴァ方言のテキスト」(坂口, S. 95-115)は4つのテキストを短文に分けて語釈しているので、とても分かりやすい。このテキスト部分を読んでから、ときおり文法の章を参照するとよい。

第4章「ロマンシュ語語彙集」(河崎・坂口, Rüegg, S. 116-146)は挨拶などの基本表現(はい、いいえ、ありがとう、おはようなど)を標準ドイツ語、スイスドイツ語、フランス語、イタリア語、スルシルヴァ方言、ラディン方言で掲げ、スイス旅行に役立つ会話(あなたはスイスで何をしますか、など)をドイツ語、フランス語、イタリア語で掲げ、全体が実用編となっている。食事・買い物・旅行関係の用語は標準ドイツ語、スイスドイツ語、フランス語、イタリア語、スルシルヴァ方言、ラディン方言で掲げている。標準ドイツ語 *guten Morgen*「おはよう」、*guten Tag*「こんにちは」、スイスドイツ語 *guete Morge, guete Tag*を見ると、「朝」と「昼」が区別されているが、フランス語 *bonjour*、イタリア語 *buongiorno*、スルシルヴァ方言 *bien di*、ラディン方言 *bun di* では「朝」も「昼」も同じになっている。*giorno* (< *diurnus*) と *di* (< *dies*) を比べると、後者のほうが古形を示している。「あなたはスイスで何をしますか」のイタリア語は *Che cosa fate...?* (S. 119) よりも *Che cosa fa...?* のほうが普通だと思われる。同様に「空いている部屋がありますか」(S. 121)のイタリア語 *Avete ancora stanze libere?* は、ドイツ語の例では *Haben Sie ein freies Zimmer?* のように目的語が単数形になっているので、*Ha una stanza libera?* のほうがよさそうだ。*fr. Avez-vous?* は *it. Ha?* または *Ha Lei?* が普通。「このテーブルは空いていますか」のイタリア語 *Questo tavolo è libera?* (S. 128) は *Questa tavola è libera?* とすべきである。*tavolo* は「事務机」、*tavola* は「食卓」である(古典ラテン語にはこの区別がなく、*tabula* のみである)。

随所に、現代の生活を思わせる写真が添えられている。参考文献 (S. 27–29, 147–150) も、くわしい。

本書は日本・スイス国交樹立 150 周年記念事業とある。人口 720 万、面積は北海道の半分、平和の国スイスは話題が多い。2014 年 6 月には皇太子殿下がスイスを訪問し Neuchâtel で英語のスピーチを行った。ヌシャテルは形容詞の位置がゲルマン語的だが、同じ意味の地名 Châteauneuf は語順がロマンス語的で、フランスに何か所もある。皇帝 Augustus は Rhaetia のワインを好んだそう (中川良隆氏の講演「古代ローマを知らずしてワインを語ることなかれ」2014)。日本人にとって、なつかしい『アルプスの少女ハイジ』のテレビアニメ (1974 年) の舞台 Maienfeld は人口 4000 の町で、Graubünden 州にある。マイエンフェルトはケルト語 magus (野原) の集合名詞 magia に同じ意味のドイツ語 -feld をつなげた二言語並置名 (Schorta 1964) だが、今はドイツ語圏になってしまった。

散発的な論文を除けば、本書はわが国で最初の本格的な専門書であり、パイオニアとしての試みは成功していると言える。第 2 版の機会があったら、「スルシルヴァ方言-日本語」のグロッサリーがほしいところだ。できれば、語源 (ラテン語相当語) もつけてほしい。vin tgietschen 「赤ワイン」(S. 63) の tgietschen や, tedlar 「聞く」(S. 78) など、Meyer-Lübke (1972) で探したが、分からなかったのだ。

参考文献

- Cherpillod, André (²1991). *Dictionnaire étymologique des noms géographiques*. Paris, Masson.
 Meyer-Lübke, Wilhelm (²1972). *Romanisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg, Carl Winter.
 Rohlf, Gerhard (1983). *Romanische Entlehnungen aus germanischer Grundlage. Materia romana, spirito germanico*. München, Verlag der bayerischen Akademie der Wissenschaften (in Kommission bei der C. H. Beck'schen Verlagsbuchhandlung).
 Schorta, Andrea (1964). *Rätisches Namenbuch*, Bd.2, Bern, A. Francke.

(大学書林 2013 年)

Ingerid DAL / Hans-Werner EROMS:

Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage. 4. Aufl.

黒 田 享

Ingerid Dal (1895–1985) の *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage* は統語論の視点からドイツ語の歴史的变化を辿るコンパクトな概説書として広く知られている。もともとドイツ語学を学ぶ学生向けに Jacob Grimm, Hermann Paul, Otto Behagel などの大著に依拠して書かれたものだが、優れたドイツ語研究者として知られる Dal 自身の研究成果も多く盛り込まれ、ドイツ語史に取り組む者に様々な示唆を与えてきた。

ただ、もともとの初版が 1952 年であった上 (初版前書きによればその礎となったノルウェー語版はさらに 10 年以上遡る)、1966 年に刊行された第 3 版以降は改版が途絶えていた。20 世紀後半のドイツ語研究においては研究上のパラダイムシフトが次々に起こり、特に統語論の性格が大きく変化した。この影響はドイツ語史研究にも及び、歴史統語論の分野では 19 世紀以来の伝統とは大きく異なる議論がされるようになった上、記述も飛躍的に精密化した。こうした状況は幅広い論考を取めた Anne Betten (編) による *Neuere Forschungen zur historischen Syntax des Deutschen* (1990) や Arne Ziegler (編) による *Historische Textgrammatik und Historische Syntax des Deutschen: Traditionen, Innovationen, Perspektiven* (2010) といった論文集から見て取ることができる。しかし、こうした研究書とは別に、近年のドイツ語歴史統語論の成果を手軽に概観できる資料があることが望ましいことは言うまでもない。

評者が今回発刊された第 4 版の計画を知ったのは 1995 年のことだったが、上述のような状況の中で、新版が満を持して世に出たということになる。

本書が収められる Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte 叢書の特徴は改版においても基本的に旧版の構成が踏襲されることだが、本書も例外ではない。本書は第 3 版と同様に「I. 名詞」「II. 前置詞の格支配」「III. 形容詞」「IV. 代名詞 (類)」「V. 冠詞」「VI. 動詞」「VII. 一致」「VIII. 否定」「IX. 主語なし文・『非人称』構文」「X. 語順」「XI. 文の連結」の 11 章で構成される (第 1 章の前には「序章」が置かれている)。記述にはかなり手が増えられているが、旧版の内容がそのまま保持されている部分も多く見られるし、節構成も保たれている。

こうしたあり方については異論の余地があるかも知れない。本書の記述は第 3 版同様、ドイツ語の発展に沿って観察できる統語的变化の具体例の提示とその説明を中心にしており、先行研究の批判的検討がされることは稀である。この観点からは、テーマや対象読者がほぼ重なるが、研究史に沿った書き方である Jürg Fleischer/Oliver Schallert によ